



ちやんこ巴滬 巴滬新聞

平成 27 年 6 月 1 日 (水)
発行 ちやんこ巴滬
東京都墨田区両国 2-17-6
TEL 03-3632-5600

第 14 号

涼を愉しむ

夏の暑さは愉しむもの

清々しい川魚や太陽の恵みをいっぱい浴びた夏野菜

涼やかな彩りを、目で、舌で味わってください



大相撲を支えて30年

両国国技館の裏側に迫る

「土俵」。それは直径わずか十五尺(4.55m)の中で、四十貫(約150kg)を超える大男たちが待ったなしの勝負を繰り広げる神聖な場所。その小さな舞台には、二人の力士と神聖な装具を身につけた行司のみ。立合いの瞬間、頭から激しくぶつかり合い、互いの得意技を出し合います。土俵を取り囲む多くの観客たちは、勝負が決する瞬間を息を飲んで見守るのです。

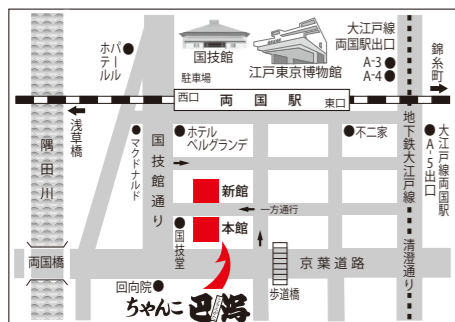
さて、「相撲」と聞くと、東京・両国を思い起こす方が多いのではないのでしょうか。ちやんこ巴滬も、両国の地に店を構えて39年。そのルーツは、昭和初期に活躍した、小結・巴滬関(後の9代目友綱親方)と、その次男・工藤建次が、友綱部屋跡に開業したことに始まります。

そんな両国のシンボリックな存在が「両国国技館」です。現在の国技館が建設されたのは、昭和59年11月のこと。緑色の銅板葺きの大屋根に地上2階地下1階建て、収容人数1万1千人、総工費150億円かけて建設されました。翌昭和60年初場所で落成式が盛大に催され、千代の富士、北の湖の両横綱による三段構えが披露されました。(※三段構えとは、相撲において特別な時に執り行われる儀式のこと)

2011年の名古屋場所で大鵬の優勝回数32回を超え、通算ぶつた魁皇関。今年の初場所で大鵬の優勝回数32回を超え、通算優勝回数新たな記録を44年振りに更新した白鵬などの活躍で、再び相撲が注目を集めています。また外国人観光客など、国籍を問わず、両国国技館を訪れる人が増えています。

しかし、その舞台となる両国国技館がどのような造りになっているのかはあまり知られていません。巴滬新聞第14号では、11代目友綱親方にご案内していただき、両国国技館の舞台裏をご紹介します。

巴滬 女将 工藤みよ子



ちやんこ巴滬 検索

ちやんこ巴滬

ご予約 ☎ 03-3632-5600
お問合せ FAX 03-3635-3056
〒130-0026 東京都墨田区両国 2-17-6

全300席 本館130席 新館170席
営業時間
平日 11時半～14時 17時～22時
土・日・祝日 11時半～14時 16時半～22時
※6月～8月は月曜定休

両国の見どころ 江戸東京博物館

NHK大河ドラマ「花燃ゆ」の主人公、文や吉田松陰ゆかりの品々を一堂に集めた。幕末維新期の動乱を感じられる展示会です。

2015年 NHK大河ドラマ 特別展 花燃ゆ
6月4日～7月20日

ちやんこ巴滬

大相撲を支える舞台裏の魅力

●相撲の聖地・両国が根付いて250年

相撲といえば両国、というイメージが根付いたのは江戸時代まで遡ります。農耕儀礼の神事として始まったといわれる相撲ですが、江戸時代になると、主に公共社会事業の資金集めのための勸進相撲興行が行われるようになりました。その勸進相撲が両国・回向院で開催されるようになり、やがて常設場所「回向院場所」が年に二回開かれ、大相撲が両国の代名詞となっていたのです。

いまや国技と呼ばれている相撲ですが、国技として定着したのは、明治42年（1909年）、回向院の隣に旧国技館が開場したことに端を発しています。巨大な傘のような屋根から「大鉄傘」の愛称で親しまれた旧国技館は1万3千人を収容できる大きな施設でした。昭和20年（1945年）の東京大空襲で焼失してしまいうまで、数々の名勝負がここで繰り広げられました。

その後、国技館は蔵前へと移ります。昭和29年（1954年）に完成した蔵前国技館は、享保年間より250年続いていた土俵周りの四本柱を撤廃し、吊り天井を設置し、四隅に房を下げるようになりました。そして、昭和59年（1984年）9月場所千秋楽を最後に閉館したのです。

再び、両国に国技館が戻ってきたのは、同年11月のことでした。当時、相撲協会理事長を務めていた春日野親方（元横綱・栃錦）の尽力があり、両国国技館復帰を実現したのです。変遷の歴史を辿った国技館は、今年開館30周年を迎えます。

●角界に入門した力士の登竜門

国技館の正面入口から向かって南側にあるのは、「相撲教習所」。新弟子検査に合格した入門間もない力士たちを育成するために、昭和32年に日本相撲協会により設立されました。

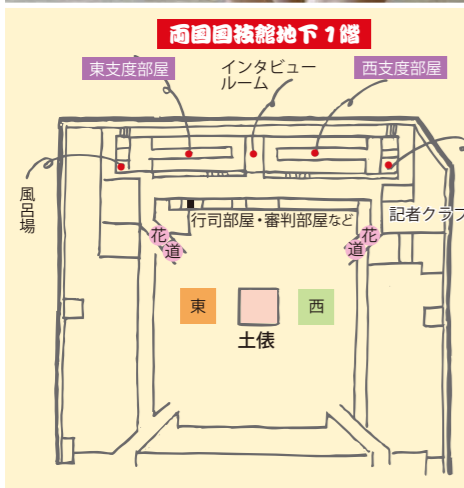
相撲教習所では、実技と教養を中心に、相撲のイロハを学びます。実技では、四股、鉄砲、股割り、すり足、伸脚などの基本を学び、それを繰り返し稽古します。ケガ防止のため、受け身や股割りは徹底して教えられます。時には、先輩力士が上に乗って股割りを教えることもあるそうです。

教養分野では、相撲史、運動医学、社会学、書道、生理学、相撲甚句を日替わりで学びます。また、日本に来て間もない外国人力士は、日本語や文化を覚えるために一年間在籍するそうです。日本での生活に馴染めるように、各部屋、相撲教習所で教えるのです。

授業は7時から始まります。1時間の座学と2時間の稽古を終え、昼飯を食べてそれぞれの部屋へと帰っていきます。

現在、生徒は64人、年寄りや現役力士が指導員を務めます。友綱親方は、相撲教習所所長に就任されているので、教壇に立つこともあるのだとか。ほとんどの力士たちは半年で卒業証書を手にし、その後は、厳しい角界の道を極めるために各部屋での稽古に励むのです。

ちようど取材をさせていただいたときも授業の最中で、まだ髷を結えない新米力士たちが静かに勉強していました。壁には「力士就業心得」が飾られており、力士としての立ち居振る舞いから徹底して教えられていることが分かりました。



●相撲の歴史を知る「相撲博物館」

では、国技館内の探検を始めましょう。JR両国駅を降りるとまず目に留まるのは、各部屋・力士たちの色とりどりに描かれた「のぼり」と、高さ約20mの櫓です。櫓の天辺には太鼓が置かれ、合わせて「櫓太鼓」と呼ばれます。もともとは梯子で登っていたそうですが、いまは内部にエレベーターが付いています。場所中は、朝8時、開場の合図である「寄せ太鼓」と結びの一番が終わった合図「はね太鼓」が、二人の呼び出しによって打ち鳴らされます。

また、場所中には櫓から二本の棹が突き出します。これは「出しっ幣」と呼ばれるもので、先端には麻と幣が結びつけられています。天下泰平、五穀豊穰、好天に恵まれますようにとの意味が込められた「出しっ幣」。もともと神事から始まった相撲の歴史がここにも残されています。

正面入口横には「相撲博物館」があります。ここには、錦絵や番付、化粧廻しなど相撲に関する貴重な資料が展示されています。展示は年に6回替わり、時代に名を残した横綱や大相撲を支える行司の装束などの展示を楽しむことができます。6月19日（金）までは「両国国技館開館30年記念 両国国技館を沸かせた力士たち」を見ることが出来ます。

場所中以外でも開館していますので、（しかも入館料は無料！）ぜひ両国にお立ち寄りになられたときには、「相撲博物館」に足を伸ばしてみてください。素敵な発見があるはずですよ。

●土俵が作られる前の館内は静寂に包まれていた

いよいよ国技館の中に入ります。最初に立ち寄ったのは「相撲案内所」でした。お茶屋さんの呼び名の方が親しまれているのかもしれませんが、館内には20軒の案内所があり、それぞれの屋号の他に1番から20番の番号が振り分けられています。これは、新国技館建築の際に分かりやすいように番号を付けたことが始まりだそうです。

相撲案内所では、たっつけ袴姿の「出方さん」と呼ばれるスタッフが飲食の接待をしてくれます。取材時は閉まっていたが、場所中は多くの観客がお土産やお弁当を求めて長蛇の列ができ、賑わいを見せます。

そして、国技館のメイン会場へ。まだ土俵が作られていない会場は、暗く、とても静かでした。場所中は、土俵、吊り天井、溜り席が設置されるため、もっと狭いように感じますが、何も設置されていない状態だとこんなに広かったのかと驚くほどでした。

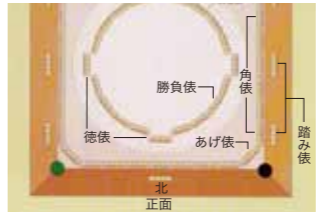
さて、平均体重150kgを超える力士たちの15日に及ぶ熱い戦いを支える土俵。これらは、全て人の手だけで行われます。通常、土俵は場所初日の5、6日前から3日間かけて、総勢45名の呼び出しによって作られます。

土俵は「土俵規定」と呼ばれる厳格な決まりに基づいて作らなければなりません。例えば、高さは34、60cm、一辺6・7mの正方形の中に66個の俵を埋め込むこと、また中央の円は4・5mなど詳細に記載されています。

●一つひとつ手作業で行われる土俵作り

土俵作りの工程は、前場所の土俵を切り崩すことから始まります。場所が終わると土俵は昇降機で下の階に収納されます。二ヶ月振りに表舞台へと表れた土俵は、乾いて固くなっており、その表面を手作業で切り崩し、外へと運びます。そして新しい土俵を作るために、約10トンの土を盛るのです。使用するのは、千葉県我孫子市周辺の重い粘土質の土で、乾燥すると固くなり、振動に強く型くずれしにくい特性があります。

凡そ土俵の形に成型すると、側面を突き固めます。次に土俵の上を呼び出した者が列を為し、土俵上部を隅から隅へと踏み固めます。表面が滑らかになつたら、いよいよ俵を埋める作業です。直径4.5mの円を描き、一つひとつ俵を埋め込みます。この俵は「勝負俵」と言います。地表に出る俵の高さは、わずかに5.2cmですが、土俵際で足をかけて踏ん張る力士たちにとっては、勝負が決まる重要な俵です。土俵に使われる俵は、他にも徳俵、角俵、あげ俵、踏み俵、水桶俵があり、全部で66個あります。



また、勝負俵の周りには「蛇の目」と呼ばれる砂が撒かれています。これは安全面の配慮と力士の足跡が残りやすくするためです。最後に表面を美しく、滑らかに整えられると土俵が完成します。

場所前日には、土俵の中央に「鎮め物」(勝ち栗、昆布、スルメ、米、塩、櫃の実)を神への供物として埋めるのです。この様子は「土俵祭り」として一般の方もご覧いただけます。



「タタキ」を使って土俵の表面を固めている



まだ土俵が作られていない会場内



浴槽内の様子



支度部屋内。正面奥には横綱が座る



場所中の吊り天井



下から見た吊り天井の様子

●力士たちの控え室「支度部屋」

次に案内していただいたのは、普段は目にする事のないバックヤードの「支度部屋」でした。集中力と緊張感を極限に高めた力士たちが歩く「花道」を通り、「東支度部屋」へと向かいました。

支度部屋は東西に二カ所設けられ、それぞれの番付表に従って部屋が振り分けられます。部屋内には、高さ約50cmに作られたクロス張りの床があり、奥から番付順に明け荷を置いていきます。重さが10kgにもなる明け荷には、座布団や化粧廻し、締め込み、着替え、テーパーリングなどが入っており、場所中は置いたままにするそうです。しかし、明け荷が置けるのも十両以上。幕下力士たちは、自分の荷物を毎日持ち運びしなければならぬという、相撲界の厳しさがここにも表れています。

他にも、取組み前に集中力を高めたり、ウォーミングアップをしたりする「鉄砲柱」や取組みを生中継で見られるよう、テレビも設置されていました。

入口左手は、お風呂場とトイレがありました。少し深めに作られた浴槽は、想像通りビックサイズ。お湯が溢れないようにするため半分くらい入った状態で準備されているそうです。あまり砂が付くことのない力士はお風呂に入らず、そのまま各部屋に戻ります。

勝負の前の緊張感や、勝負直後の高揚感が入り交じる支度部屋の中では、どんな会話が交わされているのでしょうか。興味は尽きません。



支度部屋の「鉄砲柱」

●行司部屋から、地下一階の大広間へ

支度部屋から通路を挟んで反対側には、「行司部屋」があります。巴海会員の皆様には番付表を場所毎にお送りしていますが、実際は皆様が目にする番付表の4倍の大きさのケント紙に、約10日かけて書かれます。曲尺かねじやくを使って割付を行います。縦方向の文字のバランスは目見当で行うそうです。バランスよく書かれた相撲文字は、芸術品とも言えますね。初めて番付に名前を載せることが出来るのは序の口ですが、その文字は細く

小さいもの。一方で横綱はその強さを表すかの様に太く、大きく書かれます。これらは7本の筆を使い分け、番付表の左隅下から書かれているのです。

取材時も相撲文字の練習をする行司の姿を見かけました。力強く美しい相撲文字は日頃の練習の賜物だったのです。

行司部屋の隣には、審判部屋があります。他にも、インタビュールームや呼び出し控え室がありました。大広間では、場所中に各部屋のちゃんこが振る舞われます。場所以外には、幕下力士の引退相撲や断髪式が行われたり、後援会などの宴会が催されたりするそうです。

さらにその地下では、国技館の名物「焼き鳥」が作られています。焼き鳥である所以は、「二本足で立ち、手をつくことがない」ことから、相撲界では縁起物とされているからです。なんと場所中には、一日およそ12万本の焼き鳥が作られるとのこと。量の多さも「横綱級」ですね。



力士の強さの順位を表す「番付表」



相撲文字を練習する行事たち。板番付に書いている最中



館内で売られている名物の「焼き鳥」

「相撲の楽しみ」が深まった 国技館探索でした

今回の両国国技館の裏側見学では、場所中は見ることのできない舞台裏を見せていただき、本当に新たな発見の連続でした。

普段、私たちが目にはしているのは、力士たちの熱気で満ちあふれた国技館ですが、今回の取材ではその戦いの前の静けさを表すように静寂な館内を見て回ることができました。

最も印象的だったのは、支度部屋を見せていただいたことでした。土俵上での勝負の一瞬を迎えるまで、力士一人ひとりが思い思いに精神統一し、闘志を高めていく姿は、決して見ることはできません。取材時は寂然とした支度部屋でしたが、場所が始まると熱気で溢れかえるのだらうなと想像すると、今後の取組みが一層楽しみになりました。

最後は正面入口のところで、日代目友綱親方を囲んで記念撮影。

ぜひ、両国に来られた際には、国技館、そしてちゃんこ巴海にお立寄り下さい。美味しいちゃんこをご用意してお待ちしております。



ちゃんこ巴海 女将 工藤みよ子

両国国技館の「ハコ」と「タ」の世界

●相撲の聖地・両国が根付いて250年

相撲といえば両国、というイメージが根付いたのは江戸時代まで遡ります。農耕儀礼の神事として始まったといわれる相撲ですが、江戸時代になると、主に公共社会事業の資金集めのための勧進相撲興行が行われるようになり、その勧進相撲が両国・回向院で開催されるようになりました。その勧進相撲が「回向院場所」が年に二回開かれ、大相撲が両国の代名詞となっていたのです。

いまや国技と呼ばれている相撲ですが、国技として定着したのは、明治42年（1909年）、回向院の隣に旧国技館が開場したことに端を発しています。巨大な傘のような屋根から「大鉄傘」の愛称で親しまれた旧国技館は1万3千人を収容できる大きな施設でした。昭和20年（1945年）の東京大空襲で焼失してしまいうまで、数々の名勝負がここで繰り広げられました。

その後、国技館は蔵前へと移ります。昭和29年（1954年）に完成した蔵前国技館は、享保年間より250年続いていた土俵周りの四本柱を撤廃し、吊り天井を設置し、四隅に房を下げるようになりました。そして、昭和59年（1984年）9月場所千秋楽を最後に閉館したのです。

再び、両国に国技館が戻ってきたのは、同年11月のことでした。当時、相撲協会理事長を務めていた春日野親方（元横綱・栃錦）の尽力があり、両国国技館復帰を実現したのです。変遷の歴史を辿った国技館は、今年開館30周年を迎えます。

●角界に入門した力士の登竜門

国技館の正面入口から向かって南側にあるのは、「相撲教習所」。新弟子検査に合格した入門間もない力士たちを育成するために、昭和32年に日本相撲協会により設立されました。

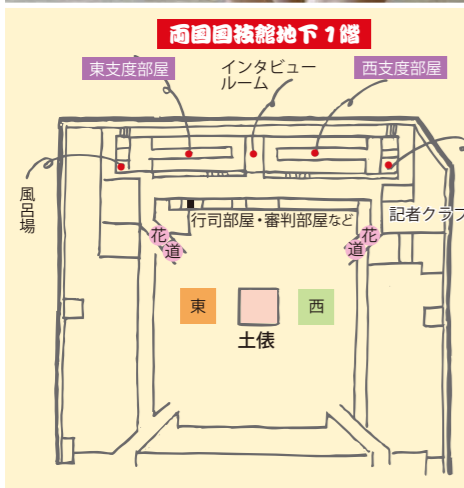
相撲教習所では、実技と教養を中心に、相撲のイロハを学びます。実技では、四股、鉄砲、股割り、すり足、伸脚などの基本を学び、それを繰り返し稽古します。ケガ防止のため、受け身や股割りは徹底して教えられます。時には、先輩力士が上に乗って股割りを教えることもあるそうです。

教養分野では、相撲史、運動医学、社会学、書道、生理学、相撲甚句を日替わりで学びます。また、日本に来て間もない外国人力士は、日本語や文化を覚えるために一年間在籍するそうです。日本での生活に馴染めるように、各部屋、相撲教習所で教えるのです。

授業は7時から始まります。1時間の座学と2時間の稽古を終え、昼飯を食べてそれぞれの部屋へと帰っていきます。

現在、生徒は64人、年寄りや現役力士が指導員を務めます。友綱親方は、相撲教習所所長に就任されているので、教壇に立つこともあるのだとか。ほとんどの力士たちは半年で卒業証書を手にし、その後は、厳しい各界の道を極めるために各部屋での稽古に励むのです。

ちようど取材をさせていただいたときも授業の最中で、まだ髷を結えない新米力士たちが静かに勉強していました。壁には「力士就業心得」が飾られており、力士としての立ち居振る舞いから徹底して教えられていることが分かりました。



高沢 工藤女将 友綱親方 佐久間 人見



幟と櫓



相撲博物館 ホームページより転載 「野見宿禰と當麻蹶速対戦の図」

●相撲の歴史を知る「相撲博物館」

では、国技館内の探検を始めましょう。JR両国駅を降りるとまず目に留まるのは、各部屋・力士たちの色とりどりに描かれた「のぼり」と、高さ約20mの櫓です。櫓の天辺には太鼓が置かれ、合わせて「櫓太鼓」と呼ばれます。もともとは梯子で登っていたそうですが、いまは内部にエレベーターが付いています。場所中は、朝8時、開場の合図である「寄せ太鼓」と結びの一番が終わった合図「はね太鼓」が、二人の呼び出しによって打ち鳴らされます。

また、場所中には櫓から二本の棹が突き出します。これは「出しっ幣」と呼ばれるもので、先端には麻と幣が結びつけられています。天下泰平、五穀豊穰、好天に恵まれますようにとの意味が込められた「出しっ幣」。もともと神事から始まった相撲の歴史がここにも残されています。

正面入口横には「相撲博物館」があります。ここには、錦絵や番付、化粧廻しなど相撲に関する貴重な資料が展示されています。展示は年に6回替わり、時代に名を残した横綱や大相撲を支える行事の装束などの展示を楽しむことができます。6月19日（金）までは「両国国技館開館30年記念 両国国技館を沸かせた力士たち」を見ることが出来ます。

場所中以外でも開館していますので、（しかも入館料は無料！）ぜひ両国にお立ち寄りになられたときには、「相撲博物館」に足を伸ばしてみてください。素敵な発見があるはずですよ。

●土俵が作られる前の館内は静寂に包まれていた

いよいよ国技館の中に入ります。最初に立ち寄ったのは「相撲案内所」でした。お茶屋さんの呼び名の方が親しまれているのかもしれませんが、館内には20軒の案内所があり、それぞれの屋号の他に1番から20番の番号が振り分けられています。これは、新国技館建築の際に分かりやすいように番号を付けたことが始まりだそうです。

相撲案内所では、たっつけ袴姿の「出方さん」と呼ばれるスタッフが飲食の接待をしてくれます。取材時は閉まっていたが、場所中は多くの観客がお土産やお弁当を求めて長蛇の列ができ、賑わいを見せます。

そして、国技館のメイン会場へ。まだ土俵が作られていない会場は、暗く、とても静かでした。場所中は、土俵、吊り天井、溜り席が設置されるため、もともと狭いように感じますが、何も設置されていない状態だとこんなに広かったのかと驚くほどでした。

さて、平均体重160kgを超える力士たちの15日に及ぶ熱い戦いを支える土俵。これらは、全て人の手だけで行われます。通常、土俵は場所初日の5、6日前から3日間かけて、総勢45名の呼び出しによって作られます。

土俵は「土俵規定」と呼ばれる厳格な決まりに基づいて作らなければなりません。例えば、高さは34・60cm、一辺727cmの正方形の中に66個の俵を埋め込むこと、また中央の円は4・5mなど詳細に記載されています。